
翳して掴むは太陽の光 欠けてゆくは無垢さの破片

椎名最子

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

翳して掴むは太陽の光 欠けてゆくは無垢さの破片

【コード】

N6990C

【作者名】

椎名最子

【あらすじ】

耳の奥にこびりついて、私を放してくれない。それは悪いけれど、たちの悪いCMソングなんかと一緒に、朝からずっと耳の奥から血液に乗って、脳味噌の中を循環していく。

耳の奥にこびりついて、私を放してくれない。

それは悪いけれど、たちの悪いCMソングなんかと一緒に、朝からずっと耳の奥から血液に乗って、脳味噌の中を循環していく。

そして残るのは重みと、慢性的な肩こりがほんの少しだけ解消されたかの様な錯覚と、強いて言えば、落とした事が無い漢字の小テストにやけに大きく付いた赤い丸。

六点以下は、再テスト。いやはや七点程足りないらしい。

投遣りに吐いた溜息は一瞬白く宙を濁してそれから排気ガスに消えていった。

私はカーディガンのポケットに、靴下の中に、四つ折りを更に半分に分った正方形の千円札を入れて歩くのが癖らしい。

その上から押し込んだ携帯や、見栄えだけが大きい大きな財布をその上から押し込む所為で、どうやら何処かに落としてきたようだ。

アスファルトの上を滑るようにして飛ばされた、モスグリーンの枯葉を踏んだら、乾いた音に寒気がした。

「モおミジさあん、帰ってきて下さあい」

私は酷く、自分でもわかる位ゆっくりと、故意にゆっくりと、高く突き抜ける声に顔を向けた。

季節一年以上先取り。大きく肩を出した白いセーターに、それに隠れてしまいそうな短い短いスカートに、脹脛より短いブーツ。ウエーブがかかったやけに色素の薄い髪が、木枯らしに揺れてふわふわと光った。

「またトリップ？」

形の良い唇に、緩やかな弧を浮かべて、彼女は笑った。その隣をまたトラックが走り去ったから、更に大きく金髪が揺れた。耳元に手を当てて、乱れた髪を直す。その奥の車道一本隔てた向こう岸で、二、三人の男達が、そんな彼女を指差して、小さく口が動いた気がした。それから彼らは確実に笑った。

彼女は私がぼーっとしている事を、「トリップ」と呼ぶ。自己の世界への小旅行。案外悪い気はしない。

「そんなだから、モミジは何考えてるんだかわからないって、皆に言われちゃうんだよ」

「カエデには、それは関係無いよ」

私は眠くて目を擦る。カエデが肩を竦めた。

風が冷たい。青空が高くて太陽が小さい。落葉樹が中途半端に裸になり、街中に赤やオレンジの所謂暖色が溢れる。澄んだ風と雑踏のずっとずっと向こうから、石焼芋を売る音が聞こえて、私は明日は雨が降るだろうと、一人勝手に予測した。白い鱗雲が西から東へと、広い範囲で広がって見せる。

私はこの季節が、嫌いではない。

「考え事してたの」

「考え事？」

「うん」

コーンスープの空き缶を、軽く爪先で蹴った。中身が未だ残っていたらしく、何処と無く鈍い音がして、少しばかり気が重くなった。空気が冷たい。鼻の奥までを一気に貫く。低いアーケードが空を隠して、寂れた町並みが余計に灰色を増した気がした。走り去る車の色までも、落ちそうな枯葉を髣髴させた。

普段より歩調を緩めて歩く。かといって、別に、カエデに合わせ

ている訳ではない。

「考え事って、何？」

また、進学の事とか？ カエデが眩しそうに目を細めた。本人は気付いていないのだろうが、無意識の自嘲と、有意識の冷やかしを模した冗句が相変わらずそれには含まれている。

私は一度足元を見て、平べったい自分のローファーが、大分古い事を改めて確認した。それから更に顎を少し引いて、自分の灰色の制服を見たら、頬に掛かった黒い髪の毛が勝手に視界に入った。

「……頭の中で、さっきから、同じ曲がぐるぐる回ってる」

「同じ曲？」

「うん」

「誰の？ それとも何かのCM？」

「違うよ。曲名はわかってるんだ」

「なあんだ」

「それをずっと、考えてた」

カエデが欠伸を噛み殺して前を向いた。頬のチークの乗りが悪そうで、よく見ると目元に薄い隈が差して見える。単なる気の所為だろうか。

唇を何度か舐めて、再びカエデが私を向いた。微かに首を傾げる。

「バッハの、『G線上のマリア』。カエデも知ってるでしょ」

「知らないよ」

「知ってるよ。有名なもの」

「知らない。どんなのよ」

頑なに知らないとばかり繰り返す、カエデに私は渋々と口を開いた。

風に唾内が乾燥していく。口の端の皮が少しばかり張り裂けそうになった。

外気に喉が震えて、私は両目を細める。

口の隙間から何処と無く、嘲笑めいた息が漏れ、それに一点「ら」の字だけ、乗せて私は歌にした。

「ああ、それ。卒業式で、聞いたやつ」

「そう、それ」

「モミジが代表で、答辞を読んだ時に流れてたのね」

「そうだった」

「うん。あたし、覚えてるからね。そこは。ちゃんと」

カエデが前を向いた。私は足を止めた。横断歩道に差し掛かったから、カエデは赤い信号をじっと見ている。

目の前を横切る車の向こうに赤い光がちらちらと掠める。こういう時、何と無く、前へと引っ張られそうになる。

視界の端に、金色がまた揺れた。西日が目に痛い。赤い光が強すぎて、信号の色が見えない。

「カエデは確か、私服で参加したんだよね」

「うん。卒業式はね。赤いチェックのスカートって、決めてたからさ」

「お母さんは、二人とも、同じ服を着せたかったみたいだよ」

「知ってるけれど、あたし、私立受験しなかったから。どっちにする制服は無理だったねエ」

「赤いスカートなんて、私は似合わないもんね」

「うん」

モミジに赤は似合わないよ。カエデが呟いた。

私は頷いた。瞼が重い気がした。明日、漢字の再テストがあるが、今日は早く眠りたい気分だった。

車の流れが止まった。排気ガスがその場に漂う。騒音の中でも、確かに遠く聞こえていた、焼芋屋さんの音が止まった。カエデが一步白線に踏み出す。

「晩ご飯、クリームコロッケ食べたいよ」

私は目を閉じた。そのまま、顎を引いて頷く。目を開くと同時に顔を上げたら、カエデは半歩先にいた。白線の先に踏み出す。

街の雑踏が遠くに聞こえる。

漂う排気ガスの向こう側に、冷たい風が吹いた。

それは火照った頬を掠めて、私は明日は雨が降ればいいと、一人勝手に思った。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6990c/>

翳して掴むは太陽の光 欠けてゆくは無垢さの破片

2009年6月29日19時18分発行